

UFOロボ・グレンダイザー外伝

— Episode 0 —

(仮題)

裕川  
涼

MISSION 1 First Contact

PHASE 1 宇宙科学研究所・観測室

警報が鳴った。

宇門源蔵は、読んでいた論文を所長室のデスクに置くと、部屋を飛び出し、資料室の向こうの観測室へ駆け込んだ。観測室には誰もいない。上空三万六千キロメートル、静止軌道上の観測衛星からの緊急<sup>エマージェンシー</sup>を告げる赤色のLEDだけが、耳障りな警告音とともに点滅していた。宇門は中央のメインスクリーンの電源<sup>パワー</sup>を入れ、コンソールを手早く操作した。スクリーンが星空を映し出す。両手でダイヤルを回すと、赤い尾を引いて飛ぶ隕石が映った。緊急警報<sup>レッドアラート</sup>が鳴ったということは、日本国内に落下する可能性があることを意味している。

「全員、大至急観測室へ集まってくれ」

宇門は、マイクに向かって叫んだ。P.T.Tが自動で入り、声に応じてLEDが点滅する。今夜の当直表では、所員の大井と山田は既に帰宅し、林と佐伯が所内に居ることになっていた。他には、那珂の原子核研究所から出向してきている暮林<sup>オホバネ</sup>研究員が、終夜実験<sup>ナイト</sup>の申

請を出して、地下の生物実験室にこもっている。

宇門がもう一度呼びかけようとしたとき、「済みません、隣で計算をしていました」と言いながら佐伯が、続いて林が駆け込んできた。メインスクリーンを見るなり、林が右端のレーダー席に座り、調整を始めた。

直径百メートル、高さ六十メートルの観測ドームの上に展開された直径五十メートルのパラボラアンテナと、鋭い針条のアンテナが回転し、周辺の空域を走査する。

浮いているものは全てレーダーに引っかかるので、観測の結果と周辺の管制情報の両方が一度にレーダー端末に表示された。空港が装備しているオート（Automated Radar Terminal System）の情報と一致しているが、研究所の端末は、さらに研究所のメインコンピュータを使って、独自のデータ処理が可能なシステムになっていた。民間航空機はトランスポンダで位置情報を発信しているので、まずそれが除外され、表示から次々に消えていく。作戦中の軍用機は、味方機と識別信号不明の国籍不明機の二種類で、こちらはトランスポンダを持っていない。それぞれの速度ベクトルから、自由落下に近い運動をしていないものとは、もかく航空機と推定して除外され、最後に一つだけ点が残った。

「捕捉できました。データを送ります」

林が言う。佐伯は、左側のコンピュータ席に着き、キーボードを叩き始めた。

「メインコンピュータとのリンク完了。記録を開始します」

宇門は、再びマイクに向かって「暮林君、聞こえるかね。観測室まで来てくれ」と呼びかけた。

宇宙科学研究所 (Institute of Space Sciences) は、宇門源蔵を所長とする民間研究所で、八ヶ岳の蓼科山の中腹に、シラカバ湖をせき止めるダムと一体となって建設された。天文台兼航空宇宙技術工場として活動している。旧日本軍が建設途中だった設備を土地ごと買い取って改造したものである。ダムの上に観測ドームといくつかの建物とヘリポートがあるが、それは研究所のごく一部分で、ダム内部の巨大な空間にも設備や実験室や工場があった。

宇門は宇宙人実在説を唱えていたため、学会からは常に異端視されていた。だが、単独で観測用ロケットを打ち上げ、それもほぼ百パーセントの成功率を誇る宇宙科学研究所の技術は世界でもトップクラスだ。宇門の説をいくら異端扱いしたとしても、この技術に支えられた観測結果の方を無視することなど到底できな

いというのが、学会の共通認識であった。その技術を支えているのが、大井、佐伯、林、山田をはじめとする所員達と、技術者達であった。

宇門は今年四十八歳、ロマンズグレーの髪を短く刈って外科医のようにまとめ、口が隠れる程度の同じ色の髭をたくわえていた。高めの身長と広い肩幅、贅肉のほとんどない体は、学者というより、むしろ現場で働く肉体労働者の頑健さを思わせる。明るいグレーを基調とした機能的なユニフォームが、精悍さをより際立たせていた。優秀な学者であることは、濃い鶯色の腫が沈着冷静かつ宇宙の彼方まで洞察する深みに満ちていることから見てとれる。

佐伯はコンピュータ担当、腕利きの魔術師<sup>ウィザード</sup>である。研究所のシステムの構築と運用のほとんどを担当し、必要なプログラムの開発もしていた。ロケットの打ち上げ時にはミッションディレクターを担当している。ちなみに、コンピュータシステムに明るい優秀な技術者のことを業界用語でハッカーと呼ぶが、魔術師<sup>ウィザード</sup>はそれよりもさらに優れた者に対する呼び名である。

林はリーダーを担当している。研究所のリーダーは、単に飛行物体を発見するというだけではなく、航空機の管制はもちろん、軌道上の衛星までリーダー追尾できるシステムとして作られていた。これを扱

う林は、元空軍のパイロットで、研究所に移ってきて数年経った今も、その腕と知識はそのまま空軍の防空司令部<sup>Defense Command</sup>に行っても即戦力として通用するレベルを維持していた。

暮林は、大学で、微生物学と公衆衛生を専攻し、博士号を取得した。本当は、アメリカの疾病対策センターのような組織で働き、世界中飛び回って新しいウイルスや菌を相手にしたかったのが、あいにく日本にはそこまでの組織は無いし、運悪くポストも無かった。そこで、放射線がウイルスや菌に与える影響を調べるといふことをテーマとして、那珂の原子力研究所にもぐりこむことに成功した。細菌を宇宙に持つていて宇宙線に晒したらどうなるかといった基礎研究を割り当てられて、それなりにこなしていたが、いかんせん、スペースシャトル計画は事故で遅れまくり、かといって種子島から打ち上げるロケットで頻繁に微生物を宇宙に持つていくこともできずで、どうしたものかのため息をつく日々だった。そんな折、八ヶ岳近くにある宇宙科学研究所が研究員を受け入れていることを知って、那珂から出向してきたのだ。

「佐伯君、速度と落下地点は？」

「秒速十八キロメートル。落下地点は……今やってい

ます」

「宇門は中央目の前のコンソールで、隕石を補足した衛星データを全て表示させた。これまでの記録と照合したが、彗星でも炭素質のものでなかつた。」

「自動警戒管制システムは何をやっている？」

「動きはありません。ICBMではないと判断したのでしょ」

「暮林が白衣をなびかせて観測室に入ってきた。眼鏡の上から目にかかる収まりの悪い髪を、細い華奢な手で掻き上げながら、メインスクリーンを見る。」

「何事ですか？……つと、これは隕石ですか？」

「そうだ。衛星軌道上で接近をキャッチし、予想落下地点が日本国内だったため自動警報が鳴ったのだが……」

「宇門はスクリーンを見つめたままだ。」

「何か気掛かりな点でも？」

「暮林が訊いた。専門が違うので、画像だけでは何がどう問題なのか判断がつかないのだ。」

「つむ……石質か鉄質かはつきりしないが、直径四十メートル程度か。これは、下まで届くな」

「そのようです。リーダーで追っていますが、燃え尽きる様子もありません」

「林はリーダーから目を離さない。」

「このままでとあと三分程度で研究所の裏の山林に落ちてきます」

「何だつて？ そんなに近いのか！ 国防軍に頼んでミサイルで破壊してもらうわけにはいかないのかね」

「無理です！ もう間に合いません」

「佐伯と林が同時に叫んだ。」

「燃え尽きずにこのサイズの隕石が近くに激突したら、直径一キロメートル以上のクレーターができる。衝突時の振動は、地震でいうなら直下型のマグニチュード七程度にはなる。大気との衝突に絶えられずに空中爆発した場合は、質量にもよるが、小型の原爆並みの爆発になりかねない。さすがにこれでは、原子力発電所を越える構造強度を持つ研究所であっても危ない。しかし、安全な場所に避難する余裕は既になかった。」

「研究所のシャッターを全部下ろそう。気休めにしかならんかもしれんが……」

「宇門は、コンソールに手を伸ばしてスイッチを押した。リモートで下ろせるシャッターを全て下ろして、ガラス窓や入り口の防護をする。」

「落下予測地点をスクリーンに出します」

「メインスクリーンの半分は、付近の地図が表示された。落下地点を示すアイコンは、八ヶ岳エリア、宇門

の私有地内である研究所のすぐ裏の山林で点滅している。落下地点を中心とした同心円は、一番内側が予想されるクレーターのサイズ、つまり壊滅的な被害を受ける区域だ。さらに、その外側には、地上の建造物が破壊される区域が地図に重ねて表示されていた。研究所は最も内側の同心円内に入ってしまったている。

「運が良くても、ツングースカを経験することになるかもしれない。被害をうけるのが我々だけだというのが、せめてもの幸いか……」

最後まであきらめてはならない、と宇門はスクリーンを見つめた。今できることは、せいぜいシャッターを下ろして、多少なりとも破壊を免れる程度のことだけだ。ならば、衝撃の第一波に耐えられたとして……その後被害の程度に応じて何をすべきか、手順を考え始めていた。

「地表到達まで一分」

林が叫ぶ。

「全員、衝撃にそなえるんだ」

暮林も空いている椅子に座って、作りつけのパネルにつかまる。宇門は椅子のひじ掛けを、そうと意識せず握りしめていた。研究所は頑丈にできているから、多少の衝撃波であれば耐えられるだろう。しかし、落下でできるクレーター内部に位置しているので

は、まず研究所裏の湖が無事では済むはずはない。地形そのものが変わってしまうような衝撃に対して、研究所を含むダムの基本部分が果たしてどこまで耐えられるのか。岩盤ごと吹き飛ばされたのではどうにも手の打ちようがない。

「地表到達」

林が言つのと同時に、ズン、と鈍い衝撃が伝わってきた。観測室が揺れる。だが、それだけだった。研究所周辺を見ている監視カメラは、直前と全く変わらない風景を映し出していた。

「おかしい、衝撃が少な過ぎる」

宇門は立ち上がり、モニターを切り替えてみたが、いつも通りの光景しか出てこなかった。研究所周辺の光景は、照明に照らされて目視できる範囲で、特に異常はない。宇門はメインスクリーンを見た。落下地点を示す赤い点が地図に表示されていた。研究所が危険区域にあることにも変化はなかった。予測通りにクレーターができていたなら、目の前に何事もなく木が立っているなどあり得ない。

「佐伯君、何が起きたかわかるかね」

「今計算しています。地表に到達するまでレーダーで追尾していたので、速度も大きさも記録しています」  
「計算結果をメインスクリーンに出してくれたまえ」

「わかりました」

位置と速度と時間が、緑のディスプレイに赤色で3次元的に描かれていく。その上に、さらに青色のグラフが重なった。衝突の直前に、赤色のグラフと青色のグラフは大きなずれを示していた。

「赤色が落下してきた軌道、青色が自由落下の場合の軌道です。大きさは変わっていませんし、落下の途中で特に崩壊もしていません」

「何と……直前に急減速して衝撃を減らしたというのが。では今のは只の隕石ではないかもしれん」

「ですが、軍用機でもスペースシャトルでも、こんな急激な減速はできませんよ。もしやったら、確実に機体が空中分解してしまうでしょうし。それに……」

キーボードを叩く音が観測室に響く。

「何だね」

「はあ、変な話なんですけど、隕石の質量そのものが変化したと考えないと、観測結果と計算が合わないんです」

「ふむ……」

宇門は観測室のドアに向かって歩き出した。

「わかった。ヘリを出してくれ。地上に行くよりも様子がわかるだろう。とにかく落下地点へ急ごう」

## PHASE 2 八ヶ岳エリア・研究所裏

観測室の後ろに百三十メートルの高さでそびえるヘリポートから、林の操縦でタンデムローターのヘリ、ボーイング・バートルCH146が飛び立った。昼間であれば紅白の市松模様が派手に目立つこのヘリポートは、中央と先端部分の衝突防止灯を一秒に一回点滅させて、強力な白色光でもってその存在を漆黒の山中に示していた。

CH146は見てくれこそ米海兵隊のシーナイトだが、人里離れた八ヶ岳近郊の山中から飛び立ち、いつでもどこにやってくるかわからない隕石や宇宙人の調査に向くことができるように大幅な改造がなされていた。ドップラー・レーダー航法装置では足りずに、ADF、INS、TACAN、FLIR（赤外線前方監視装置）、電波高度計等の計器飛行装置に加え、GPSまで搭載するといった具合に、実験機並みにいろいろ追加したため、オリジナルの機種とはコクピットのレイアウトが様変わりしていた。エンジンも換装して飛行性能が大幅に上がっているの、ほとんど別の機種と違ってよい程の能力を持つことになった。人員二十六名、担架でなら十五名を一度に輸送できるキャビン内には、担架の数を減らした代わりに隕石試料回

収や調査に用いる分析機器一式が積み込まれている。米海兵隊のカーキ色の塗装や空軍のオレンジと白の2色塗装とは異なり、研究所のヘリはイエローに塗装され、中央に鮮やかなオレンジの帯が描かれていた。国内ではこの同型機が救難ヘリや要人輸送ヘリなどに使われ、『しらすさぎ』の名で知られている。宇宙科学研究所では、それに倣って『しらすさぎ』の学名である『イーグレット』を呼び出し符号にしていた。

左側の副操縦士席に座った宇門は、FLIERとは別の探索用赤外線カメラの映像をモニターに出して地上の様子を見ていた。後方のキャビン内には佐伯と暮林が座って、宇門が見ているのと同じ映像が映し出されたモニターを見ている。

「夜でも飛行性能は昼間とまったく変わらん。しかしこれは一体何だ？」

副操縦士席の風防の前に重ねられたガラス板を見ながら宇門が訊いた。

「ガラスコクピットですよ。このスイッチを入れると、計器の情報が全部表示されます」

計器と数字がグリーンの光を放って浮かび上がった。「もともと航空機用で、ヘリを飛ばすのには別に無くてもいいんですが、あつた方がいろいろできて面白い

ので」

「戦闘機じゃないんだから——」

「まあ、趣味で航法関係を徹底改造したんで、そこいらの救助ヘリにも軍用ヘリにも負けない性能になります。早速役立つたようですね。何なら地形追隨モードにしましょうか」

周辺の地形図が表示され、ヘリの位置を示す輝点が表示された。

「おかげで安心して調査に専念できるが——やはり、下の地形は特に変わっていないようだね」

「つつきり広範囲にわたって木が倒れたりしているかと思っただんですが、異常ありませんね」

「おいちよつと待て、これじゃないか？」

宇門がモニター画面を示す。そこには完全に白一色で表示される物体が映し出されていた。

「こちらでも捉えたんで向かっていますが、赤外では判別できませんね。かなり高温のようです」

「下を照らせるかね？」

「ええ」

強力なサーチライトが見慣れた山林を照らし出す。「ふむ……視野が狭いな。照明弾を積んでいるかね」

「あります」

「では、落下地点上空で発射してくれたまえ」

「了解しました」

林は操縦桿を倒す。ヘリが軽く右に旋回した。

「落下地点です。照明弾を投下します」

二、三秒をおいて、あたりが昼間の光量で照らされ、色合いはともかく広範囲の状況を見ることができた。岩でできた小さな高台に、見慣れない円盤状の物体がある。円盤周囲の木が放射状に倒れているのは、着地の時に衝撃波でなぎ倒したものだろう。

「落ちてきたのはあれか…… UFOかもしれん。近くに着陸できそうな場所はあるか？」

「高台の北側に木が生えていないスペースがあります。そこなら大丈夫でしょう」

「よし、着陸させてくれ」

宇門は強力な懐中電灯をリストバンドに付け、高台に回り込むようにして登った。ガイガーカウンターを持った佐伯が後に続いた。北八ヶ岳の十月は、標高千五百メートルを超えると、夜は気温が下がって寒いが、まだ、息が白く見えるほどではなかった。研究所のユニフォームのまま飛び出してきたので、上着は半袖だ。それでも、体を動かすと寒さを感じなくなってくる。

「スイッチを入れたままでついてきてくれ」

首だけ振り向いて佐伯に言うと、宇門は倒れている木を乗り越えて、円盤を照らした。大きさは四十メートル程度で、両側に翼のように貼り出した部品がついている。巨大な尾翼がそそり立っており、その根元のあたりに操縦席らしき透明な風防があるのが見えた。円盤の下敷きになった木は黒く焦げて煙が上がっていた。

宇門は、ちら、と右腕のクロノグラフを見た。蛍光塗料がさほど輝いていないことを確認し、放射線のレベルは低いと判断した。

「これはまさしく円盤だ。しかも地球のものとも思えない。操縦席があそこらしいが、熱くてすぐには近寄れないな」

「問題は温度だけのようですね」

ガイガーカウンターの数値は少しだけ上がっているが、放射線防護が必要な程ではない。

「国防軍に一報入れましょうか」

追いついた林が宇門に訊いた。隕石が落下して地上が破壊されたのを、弾道ミサイルによる攻撃と誤認した結果、核戦争に突入してしまう可能性については、以前から指摘されていた。

「自動警戒管制システムが何もしなかったのなら、隕石だと正しく判断したのだらう。我々で調査してから



決めてもかまわないと思うが」

何も慌てることはない、と宇門は考えた。円盤が国有地に落ちてきたのなら、すぐに報告しておかないと後で問題が起きるかもしれない。が、幸いなことに、円盤はぎりぎり宇門が所有している山林のエリアに入っていた。素人なら専門家を呼ぶしかないだろうが、宇門は宇宙から何かが降ってくるのを研究するのが専門の一つだ。こんなときに他のグループに調査を頼んだりしたら、研究能力を疑われてしまう。

宇門は懐中電灯であたりを照らした。円盤の脇にうつぶせに倒れている人影が見えた。

「誰かいるぞ」

夜中にこんな山奥に来ていて、円盤墜落の衝撃を受けるなど運が悪い。ことよつたら大けがをしているかもしれない。宇門は急いで駆け寄った。暮林と林が続いた。

「君、しつかりするんだ」

宇門はしゃがみ込み、その人を抱き起こした。仰向けにして軽く揺さぶってみる。両手と腕が濡れる感触を感じた。怪我をされていて出血がひどいらしい。体格から、若い男性らしいとわかった。追いついた林が脇から懐中電灯で照らした。

宇門が抱き上げた男は、西洋の騎士が使つ甲冑のよ

うな形のヘルメットをかぶっていた。顔の前面を覆うバイザーが上がっていたので、頭や額から流れたらしい赤い血が、目鼻立ちのはっきりした青年の白い顔を汚しているのが見て取れた。びったり身に付いたスーツは、ところどころ破れており、血が染み出している。浅く早い呼吸をしていて、宇門の呼びかけにもまったく反応しない。

「所長、ひよつとしてその人、操縦者じゃないですかね」

林は、暗視<sup>ナイト</sup>ビジョンを片手に円盤を見ている。

「尾翼の付け根と顔みたいところが操縦席らしいんですが、誰もいませんよ」

「そうかもしれん。確かに、この恰好は地球人のものとも思えんな。だが顔や体形は地球人と同じだ」

「林さん、ちよつと下がってください」

暮林が、林の腕をつかんで宇門から遠ざけた。乱れた髪に半ば隠れた眼鏡の奥で、神経質そうな目が光る。

「所長、この人を宇宙人だと考えですか」

「おそらくな。何としても助けて、生きている状態を調査したい」

「それが最優先<sup>トップオーダー</sup>命令なのはわかりませんが、とりあえず僕のやり方に従ってもらえませんか。林さん、へりか

ら、佐伯さんと一緒にNBC患者搬送用の器具一式を持ってきてください。ついでに工作用のレーザーガンと使い捨てのNBC防護スーツも。お二人は防護スーツを着ておいてください」

佐伯と林が駆け出していった。

「何をしようというのかね」

「所長とその人をアイソレートします」

暮林は、林と佐伯が持つてきた装備の中から、防護スーツを取り出して着た。スーツは、頭からつま先まで透明な袋でできていた。顔の全面を被うマスクをつけると、フィルターを通した空気が送り込まれるようになっていた。

暮林は透明な袋に被われたNBC患者搬送用のバッグに、宇門が抱き上げている青年を注意深く入れた。

「研究所のレベル4実験室に運んでから医者を呼ぶことになるでしょう。林さん、夜だけどお願いしますよ。それから所長、すみませんが、あなたも一緒に隔離するしかなくなりました」

「あ、ああ……そうか」

宇門は、自分の両手と薄いグレーのユニフォームについた赤い血を順に見た。確かに、今触れた青年が地球人ではないのだとしたら、まず最初にすべきことは検疫だろう。

暮林は、防護スーツを宇門に着せて、本来はマスクを付けるはずの顔の部分も、プラスチックのシートで覆ってテープで密閉した。そのかわり、簡易酸素ボンベとフィルターを取り付けて、こちらもテープで固定した。中の空気はフィルターを通してから排出される。宇門はされるままにしていた。

青年を担架のせて後部ドアからキャビンに運び込んだ後、暮林はレーザーガンを手にとった。最大出力に切り替えると、青年が倒れていたあたりめがけて引き金を引いた。高出力のビームが空気をイオン化し、オゾン特有の生臭い臭いがあたりに漂う。高温に熱せられた地面が焦げて煙を上げた。林が、ライトで青年が倒れていたあたりから順に円盤の操縦席までを照らしていく。暮林は、血の痕らしいものをレーザーガンで順に焼いていった。最後に円盤本体の操縦席付近に狙いをつける。宇門が、ちよつと待て、というにも構わず引き金をひいた。血液の汚れはきれいに焼き払われたが、円盤にはなんの変化もない。

「所長、レーザー最大出力でもびくともしませんね」

「おそろしく頑丈にできているようだね」

「円盤の方は落下してくるときに高温になっていたから、表面はきれいだと思いますよ。しばらくこのままでも大丈夫じゃないですか」

「わかった。とりあえず研究所に戻ろう。林君、佐伯君、円盤の温度が下がったら、夜が明ける前までにシートをかぶせて、うまく隠しておいてくれ」

### PHASE 3 宇宙科学研究所・レベル4実験室

宇門は、研究所地下のレベル4実験設備の中で、透明なポリカーボネートの仕切り越しに、白い宇宙服のような防護スーツ姿の暮林と向かい合っていた。レベル4実験設備の中でも、最も危険な微生物を閉じこめておくことを想定して準備された一角である。血で汚れたユニフォームは既に焼却処分されていた。宇門はクレゾール消毒液のシャワーを浴びたあと、予備のユニフォームに着替えていた。

扉の入り口や、ガラス越しに見える器具のあちこちに、生物災害を警告する、遠心分離器のローターをイメージしたロゴマークのステッカーが貼られている。

既に、隔離された区画にはモニターと簡単なコンソールが運び込まれ、観測室とのリンクが終了していた。

宇宙科学研究所のレベル4施設は、本来の建物の中に、もう一つ部屋が入った構造をしていた。もともと、研究所の建物自体は高度隔離施設として作られていな

かったので、地下の広い空間に後から気密性を保つことができないユニットを運び込んで組み立てたのだ。レベル4とはバイオセーフティレベル4のことだが、P4と呼ばれることもあった。レベルが上がるほど、隔離が高度になる。地球上の細菌はすべてレベル3どまり、狂犬病やエイズウイルスでもレベル3で、レベル4が必要になるのはエボラ出血熱や黄熱病の原因となるウイルス数種類である。研究所にレベル4を作ったのは、宇宙からやってくる病原体対策を想定したためである。

実験室内の空気は、ウイルスを捕捉するフィルターを二度通過した後排出される。部屋は常に隠圧に保たれ、外部への微生物の流出を防いでいる。部屋に入るには、まず、更衣室で、宇宙服のような防護スーツに着替えることになる。スーツ内部は陽圧に保たれ、中にウイルスが侵入しないようになっていた。部屋を出る時は、スーツの上から消毒液のシャワーを浴びた後、防護服を脱ぎ、さらにシャワーを浴びてから、更衣室で着替えることになる。部屋の実験台は半閉鎖型で前面以外フードに覆われ、やはり内部が隠圧に保たれている。その中に、冷凍庫、冷蔵庫、インキュベータ、顕微鏡、遠心分離器や動物実験用の設備等が備え付けてあった。大型の実験装置の搬入口と材料の搬入

口は別々で、いずれも気圧差を保つため、二重ドアとなっていて、排出される水やゴミは、何段階かの滅菌処理の後、焼却処分となる。

実験台の設置された部屋の一番奥に、さらに気圧差を保つて隔離する部屋があった。宇門が入っているのはそこである。設備がレベル4対応とはいえ、これまでは比較的安全な——病原性が無いが、あつても既に治療法が確立していて簡単に治る——ものしか扱っていなかったたので、レベル4を想定して使用するのはいが初めてである。

「で、これからどうすればいいのかね」

「最低二週間ばかりそこに入っていてください。研究所の指揮はとれるはずですよ。地球人同士でも血液の接触による感染症には注意が必要ですが、相手が宇宙人となると、何が起きるかわからない。とにかく様子をみるしかありません」

「私自身も今回は実験体の仲間入りということか。まあいい、調べる相手はつきりしているなら後はやるだけだ」

宇宙人実在説を唱えたためにこれまでさんざん学会で異端扱いされてきたのだから、今回の円盤と操縦者の確保は立場を逆転するチャンスのはずである。しかし、発見を喜んで浮かれた様子はまったく見えず、宇

門の関心は、目の前に現れたものを調べることに集中していた。自分の身の回りのことなどどうでもよく、好奇心が全てに優先する——専門は違えど、暮林もまた同じ資質を持っていたから、宇門の振る舞いを当然のこととして受け止めていた。

「申し訳ありません」

暮林はガラス越しに頭を下げた。強制的に隔離したことと、これから先、宇門自身の調査も必要になったこと、どちらについて謝ったのか、はつきり自覚できなかった。

「いや、謝らんでもいい。不用意に触れた私もうかつだった。だが、あの宇宙人を何とか助けたい。全力を尽くしてほしい」

「わかっています。林さんが医者を呼んできたので、今、上の医務室で検査中です。幸いなことに、アイソレートのまま、断層像も全部撮影できますから。終わり次第、P4で手術開始です」

「P4でやるのかね？」

「感染症の危険が地球人並みだとわかるまでは、上の医務室を使うわけにはいかないでしょう」

「それはそうだが、医療設備はどうするのかね」

「林さんと佐伯さんに手伝ってもらって、医務室にあった器具や装置を滅菌作業中です。終わり次第運び

込んで、即席の手術室とICUを作ります」

「おおごとだな」

「他に方法がありません。だって、一般の病院に運び込むわけにはいかないでしょう？ それに、微生物を封じ込めるにはこの設備の方が優れていますから」

暮林は、佐伯と林と一緒に機材を運び込んで、P4奥の実験室に設置した。宇門も手伝った。照明の取り付けに多少手間取ったが、LEDを使った軽いものを使ったので特に問題はなかった。とはいえ、もともと手術室として使うことを想定した設計にはなっていない部屋なので、配線が不格好に床を這っている。床に水を流すこともできないので、手術後は、汚染事故があった場合と同じ手順で滅菌処理するしかない。

「もちろん治療を最優先としますが、可能な限り試料<sup>サンプル</sup>は採取します」

暮林は滅菌済みのサンプル管やシャーレを大量に準備していた。操縦者そのものからの試料採取は行わない代わりに、手術に伴って出る血液や組織片は可能な限り回収するということである。

「ただ——」

と、暮林は口ごもる。

「何かね？」

「最悪の場合は、この先所長が未知の感染症で倒れる

可能性もありますし、所内の殺菌や、このユニットの廃棄もあり得ます。覚悟はしておいてください」

「確かに、宇宙科学研究所が原因のアウトブレイクを引き起こすわけにはいかなん」

宇門はマイクを取り上げて、放送区域を所内全域に切り替えた。

「宇門だ。これから生物災害<sup>バイオハザード</sup>の可能性のある実験を始めることになった。安全に関しては十分注意しているが、万が一事故が発生した場合は、私の代理を佐伯君に頼む。P4実験ユニットの処置及び防護については暮林君の指示に従うこと。以上だ」

軽いノイズを残して放送が切れた。

「君の言う最悪の場合でも、あの操縦者と私の両方から、未知の病原体に関する情報は得られるだろう。異なる人とのコンタクトはこの先もあるだろうから、次のためにも、可能な限りデータをとっておくことだ」

「何に感染したとしても、生き延びてくだされば、所長の血清が使えることになりませう。何も起きないことを祈っています」

「手に負えないと思っただら迷わず外部に応援を頼め、その判断は任せる——おそらく私が指示を出せる状態ではなくなっているだろうからな」

「軍の細菌学研究所と国立感染症研究所が、最初の報

告先になるでしょうね」

インターフォンのブザーが鳴り、これから医者が下に降りるといふ連絡が入った。暮林は、P4への入室方法を指示するために、入り口に向かった。

「今回の患者については、くれぐれも秘密を守っていただきたい」

生物災害防止用の防護スーツで完全武装した姿の囁託医を前にして宇門は言った。

ロケットの組み立てでの打ち上げだのといった、一つ間違えば大事故につながる作業をやっていたから、宇宙科学研究所では救命救急センター<sup>R</sup>あがりの外科医を囁託医として迎えていた。幸いにして、怪我人が出るような事故はこれまでに起きていなかったたので、囁託医が存分にその技術を発揮できる初仕事は地球外生命体の多発外傷の緊急手術ということになった。

「地球人ではないかもしれない。どういふ素性のものかわからない以上、はつきりするまで公表したくないのです」

「おっしゃる通り、地球人ではないでしょうな。断層撮影画像はいくつかの点でヒトとは異なっている」

通常の手術着を着ることができないため、防護服の上からグリーンのエプロンを着けながら、医者が言った。

た。

「ただ、私が知っているのはヒトに対する治療法でして、宇宙人についてはわかりかねますが、それでもよろしいですね？」

「かまいません。引き受けてくださったことに感謝します。ところで、その違いはどの程度ですか？」

「血管の走り方や器官の形は多少違っていますが、大体の配置はヒトと同じです。生化学的機能まで同じかどうかはわかりません。手術はできると思いますが、その後の管理をどうすればいいのか……」

「とりあえず、普段、ヒトにするのと同じ治療をやってみてください。それで合わなければ仕方がない。必要なものがあれば何でもおっしゃってください。所員に頼んで用意させます」

「病院に運ぶわけにも医療スタッフを連れてくるわけにもいかないということですか」

「ええ。騒ぎを大きくするわけにはいかないのです。少なくとも今の段階では。それに、未知の感染症の危険もあります」

「手術は一人ではできませんから、手伝っていただく必要があります」

「わかりました。私と、その暮林君とで手伝いましょう。しかし、素人が手出しをしてもかまわないの

ですか？」  
 「地球人ではないのでしょうか？ それでしたら、医師法に引つかかることはありません。地球外生命体に対する研究であつて、医療行為ではないということになりますから」

操縦者は、挿管され人工心肺レスピレータを付けられて、手術台の上に横たわつていた。外見を見た限りでは、治りかけの傷と比較的新しい傷の両方があることから、長期に渡つて危険で過酷な状況にあつたことが伺えた。

「意識レベルは二〇〇つてあたりですかね。ヴァイタルは——ヒトの基準じゃ判断できないか。持つて行かれても恨まんてくさいよ、宇門先生」

「わかつていますが、こうして改めて見ると、外見はまるで地球人と変わらない……」

天文学者であり宇宙開発の技術者でもある宇門は、手術を間近で見たことは無かつた。ミッションスペシャリストとして動物実験の簡単なトレーニングを受けた経験があるだけだつた。

既に接触してしまつた後ではあつたが、さらなる感染症の危険を防ぐため、宇門は医者と同じように防護服の上から手術用のエプロンを着けた。防護スーツは約五千口の重さで、動きにくい上に、ひどく暑苦しい。

こいつは体力を消耗するな、と思いつながら、さて言われたとおり手伝いはするが一体どうなるのか、と緊張していたところへ、医者が注射器シリンジを手にして言った。

「麻酔はどうでしょうかねえ？ うまい具合に意識不明のようですからこのまま手術という手もあります。が、もし、途中で気がついて暴れられても面倒なことになりますし」

「——え？」

あまりに当たり前のことを質問されて、宇門はフーッと越しにきよとんと医者を見返した。

「そりや当然——」

「それがねえ、今回は当然でもないのですよ。何せこれは地球人用の局所麻酔薬ですからねえ」

「使つても効果が無いかもしれないということですか？」

「それだけならダメ元で使つちまいますがね」

外見が地球人と変わらないといつても、分子レベルで同じである保証はまつたくない。麻酔薬は、痛みを伝える神経をブロック——細かく言うとなん神経伝達物質の放出に至る生化学反応のどこかをブロックするか、伝達された側のメッセンジャー系の一部をブロックするか。これが分子レベルで合わないと麻酔薬は効かな

い。さらに、麻酔薬は役目を終えたら分解されて排泄されるが、その過程が地球人と異なっていた場合には、不具合が生じるかもしれない。最悪の場合は、入れた薬剤が意図したのと別の生化学反応を止めたり、他のタンパク質——そもそもタンパク質と呼べる構造のものであるかどうかすら今のところ定かではないが——に不可逆に結合して機能を止める可能性もあつて、こうなつた場合は地球人用の安全でありふれた局所麻酔薬が致命的な毒として働くことになる。

「それほど厄介な状況なのですか？ ガスで全身麻酔というわけにはいかないんですか？」

「そうなると今度は呼吸管理が問題になりますなあ。我々には地球人向けの管理方法しかわからないわけです。ま、あれこれ悩んでいても時間を無駄にするだけだし、様子を見ながら試してみますかね。どのみち何をするにしても賭けでしかないです」

「医者は、ちら、とモニター画面を見やった。怪我をしている箇所が画像で表示されている。」

まず、胸を切開し、肺に突き刺さっていた肋骨を引き抜いて止血する。骨の方を固定後、今度は正中線に沿って開腹した。宇門は術野を確保するため、医者への指示通りに鉤で筋肉ごと組織を開いていた。

「心臓に一刺しあれば厳しかったでしょうが、さしあ

たり何とかなりそうですね。手足の方も閉鎖骨折だけですし……宇門先生が血を見て倒れない方で助かりましたよ」

手を休めずに医者は言う。出血を最小限に抑えるように切開と同時に止血し、機能しないほど壊れた組織は取り除き、破れている部分は縫合する。骨折は、ひどい部分は金属を埋め込んでピンで固定し、完全に砕けている場合は骨辺を取り除いて人工骨材料を埋め込んで接着した状態で固定する。地球人と同じように反応してくれば、やがて、接続部分は自前の骨に置き換わるはずであった。人であるのが動物であるのが宇宙人であるのが、外科的措置の手順そのものにさほどの違いはない。

「もつと難しいことになるのかと思つていましたが……」

「目で見て形がわかる範囲なら何とでもなりますよ。宇門先生もなかなか器用ですね」

「正直かなり疲れていますよ。こんなことは生まれて初めてだ」

そうは言つても、宇門の体の動きは最初と全く変わらない。

「確かに作業そのものには不慣れなのですが、まだまだやれそうに見えますよ」



「まあ、長時間の作業や徹夜の観測など、しょっちゅうやっていますよ」

手術開始からすでに八時間になるうとしていた。

「問題は、この後の管理ですな。輸血はできないし、どの薬をどれだけ使うかを決めるのに、我々の医学はまるで役に立たない……つと、こんなもんですかね」

「これまでのところは、人間用の薬剤を使った場合にそうひどい副作用が起きているようにも見えませんがね」

モニターに張り付いていた暮林が言う。

「あとは、<sup>サンプル</sup>試料から、できる限りのことを調べてみます」

「お願いしますよ。大まかな構造は我々と似ていても、細かい点で機能はまるで違う。この心電図の波形だけ見ても明らかですな。人間の正常・異常のどの波形にも対応するものがありません。生理学的な値を正常に近づけるように管理すればいいはずなんですが、今回はそもそも正常値が皆目わからないことが問題なんですよ」

「とにかく、これからのことを話し合わなければなりません。午前中に所員達を集めますから、先生も同席していただけますか」

「もちろんかまいませんよ。容態の急変に備えて当分

医務室で待機していますのでね」

#### PHASE 4 宇宙科学研究所・会議室

翌日の午前中に、宇門は、会議室に所員全員を集めた。P4のモニターは会議室につながっており、テレビ会議ができるようになっていた。観測はとりあえずコンピュータにまかせて全員集合せよ、と宇門が指示を出したため、交代で観測業務をしているメンバーも全員が着席している。いつもなら宇門が座る席は空席で、そのかわり、資料を表示するスクリーンに、スライドプロジェクターで宇門の上半身が映し出されていた。

手術を手伝って汗まみれになったが着替えの予備が所内になかったので、宇門は、医務室備え付けのアンダーウェアを借りていた。緑の襟なし半袖シャツとズボン姿で、椅子に座って足を組み、TV会議のシステムと向き合った。見慣れない姿に所員達が訝しげな顔をする。

「もうわかっていると思うが、緊急に集まってもらったのは、昨夜落ちてきたものをこれからどうするか決めるためだ」

一息いれて宇門は、モニターに写った会議室を見渡

した。手術をした医師も着席していることを確認してから続ける。

「念のため説明しておく、昨夜、裏山に円盤が墜落してきた。我々は円盤とその操縦者と思われる宇宙人を、確保した。私はうまく防護無しに接触したため、しばらくこうやって隔離されることになった。ところで円盤の方はどうしたかね」

「指示通り、夜が明ける前にはシートをかけて完全に隠しました。周囲は念のため立ち入り禁止にしてあります。所長の私有地につき、ということと、隕石調査中のため、というのが理由です」

佐伯が報告した。

「他にかわつたことはあるかね？」

「ありません。実はあのあと、通信を傍受していたのですが、国防軍も国防総省も、防衛体制に変化はありません。コロラドスプリングスの北米防空司令部は、この事象をキャッチしているはずで、弾道ミサイルではなく通常の隕石と判断し、大した被害も無いから、対処の必要は無いと思っっているでしょう」

「傍受、ねえ……」

いつものことながら、思わず宇門はつぶやいた。名うてのハッカーの佐伯のいう傍受には、軍の通信網に侵入してこっそりデータをいたたいてくることまで含

まれているのは言うまでもない。そうでなければ、一介の民間研究所が防衛体制のレベルを好きなときに知ることなど無いはずである。しかし、この際それを問題にしても仕方がない、と話題を変えた。

「光子力研究所はどうかね？」

光子力研究所は先代所長のライバルであったDr.ヘルが度々機械獣を差し向けてきたため、マジンガーZとアフロダイAで迎撃していた。臨戦態勢にあるから常時索敵は行っているはずだし、何か異常があった場合には、軍からの情報も集約されていた。

「宇宙科学研究所が機械獣に攻撃されない限り、光子力研究所は動かないでしょう」

「Dr.ヘルの本拠はまだこの地球上にあります。宇宙からやってくる隕石のことはさほど気にしていないでしょう」

佐伯に続いて林が補足した。宇門は軽く頷いた。国防軍も、異種族による現実の攻撃への対応に追われ、隕石にかまつている暇などないに違いない。

「隣の野辺山は？」

「特に問い合わせはきていません。あつちは電波天文中心です」

「我々には、確保した円盤と宇宙人を調べる時間的余裕があるということだ」

会議室の画面は、傷だらけの全裸の青年の画像を映し出した。

「これが、昨日確保した操縦者だ。外見はほとんど地球人と変わらないようだ」

続いて、断層撮影像から再構築した3次元画像が、ゆっくり回転し、骨格、内臓、筋肉の順に重ねて表示されていく。ところどころ形が崩れたり不連続になつたりしているのは、怪我をしているからである。

「手術前の検査データを再構成したものですな。見ての通り、構造の方も、大まかには人類と同じです。まあ、細かいところは違っているので、人類でないことははっきりしています……」

医者が説明した。

「外科的な治療は終わっていますが、免疫系や代謝系が我々とは異なっている可能性があります。薬一つ使うにしても、どういう副作用が出るかわからず、まったく手探りの状態ですな」

「それについては私の方で実験中です」

暮林が手を挙げる。

「手術のときに、血液と組織のサンプルを採取しました。地球人との違いもそのうちはっきりさせることができると思います」

「ところでこれを見てくれ」

今度は、昨夜、発見した直後の操縦者の写真が映し出された。赤と黒を基調としたスーツを着ており、頭には甲冑を思わせるヘルメットをかぶっている。

「研究所に運び込んで手術前の検査をするまでの間にこの姿になった」

青年の姿は、古代のギリシャかローマを連想させる、ゆつたりした服を着たものになっていた。布はあちこちが破れ、血に染まっている姿が痛々しい。

「いったいどういう仕組みになっているのか見当もつかんのだ。自分で着替えられるわけがないから、自然に変化したとしか思えないのだがね。あとの方で着ていた服は、地球上のものともあまり変わらないようで、鉄で切つて脱がせることができた。いずれにしても、地球上のものでないことは確かかなようだ」

会議室の画像は、再び宇宙の姿に切り替わった。

「私も、宇宙人と同様に隔離されているのでな、時々様子を見ているのだが、その……眠り続けているようで、こちらから話しかけてもまだ反応はない。もう少し調べてから……せめて操縦者の意識が戻って、詳しいことがわかってから発表しても遅くはないだろう。それまではこの件について、情報を伏せておきたいのだ」

「所長に賛成です。我々のレーザーガンの最大出力で

も、円盤には傷一つつきませんでした。あれが宇宙人の開発したものだとするなら、その操縦者は、我々を超える知的生命体であると考えるべきでしょう」

林が言った。

「私もそう思う。迂闊な扱いはできないと思うのだ」  
人類より優れた相手とのファースト・コンタクトかもしれないのだからくれぐれも丁寧に扱う必要がある、と続けようとして宇門は黙った。人類より優れていない相手なら実験動物扱いでいい、とごく自然に考えていることに気がついたのだ。宇宙に存在する人類以外の生命体に対する敬虔さをいささか欠いてはいないか？ と少し恥じた。なかなか偏見からは自由にならないものらしい。

宇門はそれをこまかすように軽く咳払いして、モニターごしに会議室を見渡した。反対する者はいなかった。

「では、くれぐれも秘密を外にもらさないでくれたまえ。昨日落ちてきたものについて訊かれたら、ちょっと組成のめずらしい隕石だったことにしてくれ。円盤の方はシートで覆ってあるということだが、念のため、調査用のテントで完全に覆って監視カメラを設置、絶対に人を近づけないよう注意するように」

## PHASE 5 宇宙科学研究所・レベル4実験室

医者は毎日一回は診察に訪れ、操縦者の状態と宇門の体調の両方を調べていった。操縦者は相変わらず意識不明が続いていたが容態はそれなりに安定していた。宇門の方も、幸いなこと生物災害の兆候は無かった。

P4に入るには、服を脱ぎ、滅菌シャワーとエアシャワーを通り、防護服をつけるという手順で出入りすることになる。物を出し入れするときも同様である。看護士を雇うわけにもいかず、成り行き上、宇門が、操縦者の介抱をするようになった。傷口を消毒し、点滴をとりかえたり、必要な薬の注射をしたり、といったことが主な作業である。医者は、「宇門博士はなかなか器用ですな。ペテランの看護婦だったのかなここまでは……」と、宇門の手際の良さを褒めた。確かに、注射だの点滴だのといった作業に随分慣れてきてはいたのだが、本来の専門とは著しく違ったため、宇門は笑うしかなかった。

研究所の方はいたって平穏だった。あれから新たに何かが落ちてくることもなかったし、落ちてきたものについて他から詮索されることもなかった。

P4にこもりきりになった暮林の方は多忙を極めて

いた。治療に必要な生化学データを下さなければならなかったからである。とりあえず手術中に得た組織片や血液をリンゲル液に混ぜて、酸素でインキュベーションした。これでしばらくは生かしておけるので、その間に培養の準備にかかることになった。P4に隔離検査中の宇門が、作業の一部を手伝った。最初に、血液と骨片と組織をそれぞれ線滅菌した後、元素分析を行った。

「結果はどうだったかね？」

加圧滅菌装置オートクレーブに細胞培養用の容器をつつこんでハンドルを回しながら宇門が訊く。

「金属元素の組成はかなり地球人に近いです。輸液と栄養剤は地球人用のものを使って大丈夫かと思いません」

各元素がppm表示された一覧表を見ながら暮林が答えた。

出血と骨折から回復させるには、失った組織を作るための栄養分を与える必要がある。ヒトの場合は鉄とカルシウムが必須なのだが、宇宙人の場合にそれでいいのか？ というのが最初の問題なのだ。全く違う金属組成が出た場合には、他の成分をそのままにして違っている成分だけ置き換えた輸液を新たに調整することになる。普通に水溶液にしたのでは溶けないよ

うな貴金属が混じっていたりしたら、どういう化合物にして与えたらいいのか、頭を抱える羽目になるところだった。

「ただ、面白いことに、生理食塩水濃度が地球人と異なっています。地球人用の生理食塩水を十パーセント希釈したものが等張液になります」

「面白い、とは？」

「ももとの生命誕生のときの条件が、ヒト型に進化するのときの途中のどこかの条件がヒトとは異なっているのかもしれない。しかし、これは運が良かったのかもしいない」

「運？ どういう意味かね？」

「この問医者にきいたのですが、ヒトの重傷者に対しては、高張電解質輸液を使うと有効だということがわかっていそうなんです。もつとも、ヒトの場合は生理食塩水の〇・九パーセントを倍の濃度の一・八パーセントで使っているのですが、もし、同じような効果があるとしたら、今回、僕たちは、ヒト用の生理食塩水をそのまま使ったわけですが、たまたま高張液側に振れていたの、その分だけうまくいったのかもしいれません」

「ところでこの大量の培養液はどうするのかね？」

実験ベンチの上には、ガラスの瓶が百本近く並び、

それぞれにラベルが貼られていた。

「それも全部滅菌しますよ」

「なぜこんなに必要なかね?」

「どの条件が合うかわからないからですよ。地球上の生物なら細胞培養の手順など大体わかっているんですが、地球外のものだと条件出しからやるしかないですからね。はつきり言つて通常より一時間以上、余計にかかります」

「他に手伝えることはあるかね?」

「細胞を植えるあたりは職人芸なんですね。いくら、ミッシヨンスペシャリストの訓練を受けたからつて、所長が百発百中成功するようになるには半年かかります。それよりも、ご自身の血液の分析を進めていただけませんか。隣の部屋の分析装置に突っ込むだけでできます」

隔離が始まつてから、宇門は二十四時間ごとに採血されていた。これまでのところ、脈拍、体温に異常はなく、血液の方も感染症の兆候を示す変化はみられない。

「私の方は今のところ異常はない。だが、一服できないのが辛いな。急いで飛び出したので部屋にパイプを置いてきてしまった」

「P4に限らず実験室全域はそもそも禁煙です」

「飲食も禁止じゃなかったのかね? 私はここで食事をしているが……」

「こんな所で所長の即身仏ミイラを作る気はありませんからね。ご不満なら操縦者オピレーターと同じように、出られるようになるまで点滴で暮らしてみますか?」

「いや、止めておこつ。ところで、操縦者の治療でできそうなことはあるかね?」

「氷でも取り替えてきたらどうです? とりあえずは、輸液と栄養剤の成分が決まつただけでも状況が良くなつたと考えてください。こつ言つちゃ何ですが、正直な話、所長が感染症で倒れてくれた方がまだ打つ手があつてマシですよ。少なくとも医学が使えます」

「ふむ、科学的真実というものは、時として身も蓋もないな」

宇門は笑いながら言つた。

操縦者の方は、手術後、体温が四十度近くには上がつていたが、平熱が何度かわからない上に解熱剤が効く保証もないため、氷枕を使うにとどめていた。さらに、通常なら、感染症が疑われた時点で大量の抗生剤で叩くところだが、どういうアレルギー反応を引き起こすか予想がつかないためそれも見送られ、結局のところ、体力と生命力にまかせるといふ原始的な治療となつていた。

「とりあえず、有機元素の比から見て、ヒトと同様にアミノ酸も糖も与えて大丈夫そうですね。細胞培養に成功して代謝がわかってくれば、もっと効率よくやれそうですけど」

#### PHASE 6 宇宙科学研究所・レベル4実験室

「何か気がかりなことでも？」

暮林に声をかけられて、操縦者を見つめていた宇門は振り返った。ここ数日、時間があると、宇門は操縦者の傍らで様子を見ていた。操縦者の意識が戻らないので、外見と、いくつかの医療データ以上の情報は得られていなかった。

「この接触が、この先どういう意味を持つのだろうと  
思ってる」

「人間型ですからね」

「そうだ。で、我々人間と共通の性質を持っていると思うかね？」

暮林は、操縦者を観察した。何本ものチューブがつながれ、透明なケースに被われたまま寝かされている操縦者には、目立った変化はみられない。

「動物が捕食者と被食者に分類できることは、所長もご存じですよ」

「知っている」

「捕食者の目は顔の全面にあって、獲物の位置を把握するのに都合がよい。被食者の目は顔の両側にあつて、捕食者の接近を警戒するようにできている。そして、一般に捕食者の方が被食者より知的だと言われているんですよ」

「では、この操縦者は、我々と同じで、捕食者から進化してきたということかね」

「地球と同じような進化をたどつたのだとすると、そうなります」

「手放して喜んでばかりもいられんな。人間には知性もあるが、反面、愚かでもある。歴史的に見て、異なる文明が出会つた時、多くは、軍事的に劣勢な側の悲劇で終わっている」

大気圏突入しても壊れなかつた円盤の性能を考えると、どうやら今回は、科学技術では圧倒的に地球人類の方が遅れているらしい。となれば、当然、軍事的にも同じことがいえる。

「我々と共通点があるなら、意思疎通も何とかなるんじゃないですか」

「そうであつてほしいね」

見てくれの形は似ていても、この世界をどう認識するかという点でかけ離れていたら、理解しあうのは不

可能だろう。

「なぜ人間型なのでしょうね？」

「生物学者の興味はそこか。どういふ答えが欲しいのかね？」

「元素比も分子の構造も、我々が理解不能なほどかけ離れているわけではないですからね。人間型になる必然性がどこかにあるのではないか、と思ったりもします。ただ、『収斂』が起きると、無関係に似たような形をとることもあり得る。所長の専門の方で、この宇宙に本来備わつた性質だ、なんて話は出てないんですか？」

「生物の発生を許すというところまでなら宇宙の構造から導けなくもないが、人間型になるかどうかを決めるルールは、今のところ何も無い。地球上の生命の進化をもう一回同じ条件でやつたとしても、今の人類が再び現れる保証はどこにもないのだ。それに、宇宙に対して人間原理を求めるのは、あまり健全とはいえないな」

無表情になって、暮林が考え込んだ。既に、目の前の操縦者も宇門も見えてはいなかった。

「君の考えた通りに進んでかまわないよ。ただ、発表できる目処は全くないから、あまり深入りしないように」

言つてはみたものの、もし同じ事を自分が言われたとしても、調べることを止めないだろうな、と宇門は思つた。

円盤をそのまま外に放置しておくわけにはいかないのだ、格納場所を確保することが次の問題だった。

宇宙科学研究所の地上部分は、ダムの上にある直径百メートルの丸い観測ドームとシラカバ湖側に続く建物で、前方後円墳のような形をしていた。シラカバ湖側にはヘリポートがそびえていた。ダムといつてもアーチ型のスマートなものではなく、立方体に近い台形型で、厚みは最上部で三百四十メートル、幅も三百メートル近くある。ダム内部は広大な空洞で、上半分は既に設備や実験室となつていた。下半分のうち、ヘリポート下はロケットの組み立てに使つており、観測ドーム下は大規模な風洞実験室である。宇宙科学研究所では、スクラムジェットを搭載した巨大な輸送機で高々度までロケットブースターを運び上げて、切り離しと同時にロケットに点火して軌道へ投入する計画も進めていた。打ち上げ重量と初速度を稼いでより効率よく軌道へペイロードを上げることを狙つたのだ。ただし、重量物をぶら下げるか背負つた状態での亜音速から超音速での飛行となるため、接続の方法と航空機



の安定性を検討するために、しばしば風洞実験を行っていた。

宇門は、風洞実験室を一時的に片付けて円盤を格納することに決めた。研究所のコンピュータの主力が第五世代量子コンピュータに移った今、多くの風洞実験は計算機で代用できるが、ロケットの組み立てができなくなつては宇宙開発そのものに直ちに差し障るから、工場の方はそのままにしておかなければならなかった。

円盤を詳細に調べるには、床において足場を組むか、円盤自体を上下させるか、どちらかしかない。どういう仕組みで動いているのか不明だが、推進システムの実験をするのであればダムの下半分のエリアはまるごとそのために使う方がよい。そこで、円盤の方を上下に動かせる状態で格納することにした。

格納場所は二層構造で、一層目は現状のダム最下層のスペースとし、二層目を新たにその下に作る。ダム内部へは、ダム正面に出入り口を作って運び込み、円盤は二層目に格納する。エレベータで上下移動させれば、調査用の機材を一層目の床においた状態で実験ができるだろう——というのが、宇門の提示した最初のプランで、これに従って工事の手順を決めた。

ところが、工事にかかるために岩盤の調査をして

みると、ダムの地下のさらに下の部分に大空洞が見つかった。さらに詳しく調べると、空洞に降りる通路になる穴も見つかった。もともと、旧日本軍が要塞にしていた場所だから、抜け道を用意していたのだろう。その時は、今回のような工事を考えていなかったから、地下の空洞は問題にならなかったに違いない。しかし、エレベータを設置するとすると、その分だけ下に向かつて掘ることになり、空洞との間の岩盤が薄くなる。そうなつては十分な支えにならないし、エレベータもろとも空洞に落下する可能性も出てくる。下の空洞に到達する所まで地下をぶち抜き、さらに空洞の下をボーリングしてエレベータを設置するという大工事をするしかない、というのが何回目かの会議の結論だった。このため、せつかく作った図面も強度計算も全部やり直しとなり、エレベータの仕様に至るまで大幅な変更を迫られることになった。

「隔離されたのに落ち着く暇もない」

宇門はあくびをしながら食後のコーヒーに手を伸ばした。

隔離は既に三週間目に入ろうとしていた。数時間おきに意識不明の操縦者の点滴と水枕を交換し、酸素吸入のポンペを取り替える必要があったため、夜中でも

タイマーで叩き起こされることになった。一人でやっていたのではとても体がもたないので、宇門と暮林は交代で看病にあたった。それと同時に、暮林は組織培養と生化学実験を、宇門は格納庫の設計と工事の指揮をとっていたから、ほとんど休み無しで働いていたことになる。

「宇宙人實在説を唱えておられるんだから、やってきた宇宙人が原因で忙しいのは喜ぶべき事じゃないですか。手間暇かけて地球外文明探査だの恒星間通信探査だのをやっていたら、向こうから飛び込んでくれたわけですし」

「外交使節が来てくれることは期待していたがね、救命救急センターの真似事をするとは思っていなかったよ。しかも私が医療スタッフという役回りになるとはねえ」

「ところでそろそろ時間ですよ」  
「そうだった」

宇門は交換用の点滴のパックを手に、即席のICUへと向かった。操縦者は、ここ三日ほど熱も下がり、容態があきらかに良くなってきていた。挿管は既に外し、簡単な酸素呼吸器に切り替えていた。

操縦者は相変わらずNBC汚染患者用の透明ケースで覆われたベッドに寝かされていたが、宇門は防護服

を着て作業を始めた。点滴のパックを付け替えて、ついでにデータを確認しようとして、枕元のモニターに向かって身を乗り出した時、操縦者がゆっくりと目をあけた。

「気がついたか」

宇門はベッドのそばに行き、青年を上からのぞき込んだ。美しいブルーの瞳に、宇門の姿が映った。だが、表情に何の変化も見られない。

「私の言葉がわかるかね？」

宇門は、大きめの声ではっきりと言った。圧力差を保つための空調の音がうるさいので、意識して声をださないと聞こえない。

「わかり……ます」

青年がかすれた声で答えた。そのままベッドに手を上げて起きあがるうとしたが、「うっ」とうめき声を返している。

「無理をしてはいかん。君はひどい怪我をして、二週間以上、ずっと意識不明だったのだ。できる限りの手当はしたが、まだ動いてはいかん」

「グレンダイザーは……僕の乗ってきた……どこに……」

「グレンダイザーというのがあの円盤の名前かね？」

君は、私の敷地内に墜落したのだ。そのままにしてあるよ。ただし、目立ちすぎるのでシートをかけて、すぐにはわからないようにしてある」

「あれを奪われるわけには……」

青年は目を閉じたまま、荒い呼吸に乗せてとぎれとぎれに言う。

「今のところ、奪いにきた者などおらんよ。近寄った者もない。我々はいろいろ調べようとしているからね」

宇門は言った。

「何かあったのですか？」

話し声をききつけて、暮林がのぞき込んでいる。

「医者を呼んでくれ。意識が戻ったようだ」

宇門は言った。暮林は駆け出し、インターホンで医者を呼ぶように所員に伝えた。十分ほどして、医者が防護服に身を包んでやってきた。どうやら、医務室でずっと待機していたらしい。

「意識が戻ったのなら、もう心配いりませんな。動かしても大丈夫だ」

医者は、簡単に検査データをチエックした。

「そろそろ上の医務室に運びますかな。生物災害の兆候もないし、隔離検疫をこれ以上続ける必要はないのではないですか。現に所長もびんびんしておられるよ

うですし」

#### PHASE 7 宇宙科学研究所・医務室

青年は、名を『デューク・フリード』と名乗った。

医務室に移動させたので、宇門の付き添いも以前より楽にできるようになった。入れっぱなしにしていた点滴や排泄用のチューブを外して、デュークが何とか起きられるようになるまで、さらに二週間を要した。起きていられる時間がだんだん長くなってきたので、宇門は、写真やイラストが多く出ている簡単な百科事典を運び込んだ。地球とはどういうところなのか、まずは知ってもらおうと考えたのだ。宇門が時々医務室をのぞくと、デュークは熱心に読んでおり、宇門にこれ訊くのだった。

やつと普通に食事ができることになったその日、宇門はスプーンを運んで、デュークのベッドのテーブルに置いた。

「地球人の味覚とは違うかもしれないな。口にあうとよいのだが……」

デュークはまだ右腕を吊った状態で使えず、左手でスプーンを握って一口ずつ飲んだ。

「大丈夫です」

「どうやら、地球人とそうかけ離れたものを好むわけでもないらしい。」

「しばらく食べていないのだから、ゆっくり食べなさい」

宇門はデュークが食べる様子をずっと見ていた。肩まで伸びた栗色の髪、鼻筋が通って整った顔立ち、蒼い瞳、どう見ても、どこにでも居る地球人の——西欧系の——青年である。宇宙人であるということをおぼろげに忘れそうになった。

「ところで、グレンダイザーはどうなっていますか？」

「まだ、君がやってきたときのままになっているよ。そのままだと目立つので、シートをかけてあるが、動かしてはいない。正確に言うとおかし方がわからないのだ。いつまでも放っておくわけにはいかないが、ろくな道も無い山の中を一体どうやって運んだものか、考えているところだねえ」

四百トン以上五百トン以下、というのが、計算ではじき出したグレンダイザーの重量推定値だった。陸路であれば、宇宙口ケット用の重量物輸送車で運べるが、八ヶ岳山中では道がないため使えない。空輸しようにも、最大の軍用輸送機C-5Bの積載量は百二十トンであり、仮にまともな滑走路があったとしても、くくりつけたら離陸すらできない。勿論、そこら

の輸送ヘリが束になってかかっても、持ち上げることさえ不可能である。地球上のものなら部品に分けて運ぶところだが、地球上の科学技術を超える円盤では、うっかり分解することもできない。もつとも、円盤の外装は非常に頑丈で地球上の工具ではまったく歯が立たなかったし、内部構造についての情報を得ようとX線から超音波まで試したが、何も透過してこないの、結局のところ、外見以外に何もわからない状態が続いていた。

「動かしてみましようか？」

「やってみると助かる」

「目立たない場所に移動させたいのですが」

「それならこの地下に格納場所を作っておいた。この下のダムの中あたりに出入り口があるので、そこから入れてくれないか」

「ずっと隠しておけるでしょうか？」

「君が円盤でここにやってきたことは、所員達も既に知っているよ。だが、外には漏らさないように言っている。我々が敵ではないことは、君の手当をしたことからわかったと思うがね。それにグレンダイザーは宇宙から来たものだ。何かまずいことが起きたら、あれはいつでも宇宙に飛び立てるのだから。だったら、しばらくここに置いておいて大丈夫だと思うが」

なおもデュークが迷っているのを見て、宇門はさらに続けた。

「そういえば、奪われると困るとか何とか言っていたな。我々がグレンダイザーを奪ったり破壊したりする気があるなら、この一ヶ月の間にやっておつたよ。そうしなかつたということで、とりあえず我々を信用してはくれんかね？」

正直な所、手の出しようがなかつただけかもしれんがね、と付け加えるのはやめた。少なくとも調査以外の意図を持っていなかったことも確かだったからだ。

「わかりました。案内してください」

「へりで先導するつもりだが、ゆっくりでも飛べるかね？」

「空中で止まることもできます」

「それなら大丈夫だ。今夜移動させよう。今のうちに休んでおくように」

#### PHASE 8 八ヶ岳エリア・研究所裏

人目を避けるため、夜になってから、宇門は林・佐伯の両所員とともに、へりに乗り込んだ。林が操縦し、副操縦士席には佐伯が座った。デュークはキャピンのストレッチャーに乗せられ、上半身を起こして窓

の外を見ている。宇門はデュークに付きそつていた。

前着陸したのと同じところにへりを着陸させた。デュークはまだ手足をあちこち固定されていてほとんど自由にならない。宇門はデュークを抱き上げて、ゆっくりと斜面を登っていった。

グレンダイザーは、建築用の青いシートで覆われており、外から見ても何があるのかわからないようになっていた。佐伯が周囲に張られた、シート固定用のロープをほどいていた。宇門は、倒れている木をうまく利用して、デュークの言う通りに、尾翼の付け根のところまで上つていった。デュークが手を触れると、キャノピーが開いた。宇門は、デュークをそつと操縦席におろした。

デュークは左手でコンソールを叩き始めた。右手は吊つたままである。複雑な形をしたパネルのいくつかが輝き始め、低いうなりが伝わってきた。

「片手で大丈夫か」

「ええ、ゆっくり飛ばすだけなら。それよりも、これから飛びますから降りてください」

「へりのサーチライトを目印についできてほしい。ダム我真ん中あたりの出入り口から中に入って止めてくれ。奥の方に丸い台があるので、その上に着陸させたら、そのまましばらく待っていてくれ」

宇門は円盤から駆け下り、ヘリへと急いだ。佐伯が後に続いた。ヘリが飛び立つのと合わせるように、グレンダイザーもゆっくりと浮かび上がった。被っていたシートを振り落としながら、高度を上げていく。ヘリが研究所への進路をとると、その少し後から同じ速度で追ってきた。

「慣性制御が重力場推進が、いずれにしても我々が手にしている飛行原理ではないな。予想はしていたが、目の当たりにすると実に興味深い」

ジェット機のように空力で揚力を生み出しているなら、低速で飛行するヘリに合わせて飛ぶと失速して墜落するだろう。が、それ以前に、円盤形では揚力などそもそも稼ぎようがない。地球上の飛行物体とは全く別の原理で浮いていると考えるしかなさそうだった。

グレンダイザーがダム<sup>ダム</sup>の格納庫の中に姿を消したのを見とけてから、ヘリを着陸させた。宇門はヘリポートから地下へと急いだ。

指示したとおり、グレンダイザーは入り口の方を向いた状態で台の上に着陸していた。

『今、高さを調節するからそのままにしてください』  
格納庫に宇門の音がスピーカーを通して響く。宇門は、エレベータの電源を入れ、続いて下に移動させるボタンを押した。機械音が反響し、ゆっくりと台が

降下を始める。操縦席と床の高さがほぼ同じになったところで、移動を止めた。グレンダイザーの上を歩き、操縦席のキャノピーを軽くノックする。デュークはキャノピーを開き、操縦席上部のレバーを押し上げたが、自力では立ち上がれない。宇門はデュークに肩を貸し、固定されている手足が引っ掛からないようにして操縦席からそっと引っ張り上げた。

「傷は痛むかね？」

「大丈夫です」

「私の部屋でコーヒーでも淹れよう。訊きたいことは山ほどあるんだ。話してくれるね？」

#### PHASE 9 宇宙科学研究所・所長室

きっかり十五分後、宇門はデュークと、所長室の応接セットで向き合っていた。所長室は広々としていて、応接セットは入り口を入ってすぐ右側にあつた。奥の窓際に、窓に背を向ける形で宇門の机がある。多くの場合、活動的な研究者の机の上は書類が積み上げられていることが多いのだが、宇門の性格の故か、書類や資料などは左側の棚に整然と片づけられていた。その棚の前には小さなテーブルがある。右側の壁には、隣の資料室に通じるドアがあつた。

「ここは、あなたの家なのですか？」

先に口を開いたのはデュークの方だった。

「家？ いや、違うよ。家は少し離れたところに別にある。ここは私の研究所だ。宇宙科学研究所といつてね、宇宙の観測をしている所なのだ。私が所長なのだよ」

「では、宇宙からやってきたものを調べることもあるのですか？」

「それも研究テーマのうちの重要な部分だよ。君は、私の所有する山林に墜ちてきたのだ」

宇宙はデュークを見た。まっすぐに見返すデュークの青い瞳と目があった。あからさまな好奇心を見せるのは失礼だろうな、と思う。

「だから、いろいろ話を聞かせてもらえるとありがたいのだが」

宇宙はコーヒーをすすった。

「言葉を通じて助かったが、一体いつどうやって日本語を知ったのかね？ 君の乗っていたあの円盤は、日本どこるか地球上のものとも思えないが？」

「言葉の問題は、僕たちの技術なら簡単に解決できます。言語体系の違う星に行った時に、できるだけ早く急にコミュニケーションを確立するために、そこから言葉を分析し強制的に脳に送り込む技術があるので

す。グレンダイザーは、日本に近づいて墜落するまでの間、飛び交っていた通信を傍受して僕に教えたのです」

「なるほど、君たちの世界では、自由にいろんな星に行き来していたのだな。そういう技術が必要になるわけだ」

知的生命体とのファースト・コンタクトを望んだ人類が、人体の絵や元素の周期表を刻みつけた金属パネルを衛星に積んで太陽系外へ送ってから随分と経つ。人類が思いついた共通の言語とはその程度のものであって、他に共通の言語となりそうなものを見いだす方法は未だ見つかっていなかった。それに比べて何という差か、と宇宙はため息をついた。

「ところで、グレンダイザーという円盤のことだが、あれは一体どういうものなのかね。作られた目的や性能について知りたいのだが」

「あれは僕の生まれた星、フリード星の守り神です。僕が生まれた頃に計画されて、十年以上かけて完成したものです。フリード星の科学技術の粋を集めたものなので、同じ性能のものは他には作れなかつたときいています。円盤型をしています。ロボットが中に入っていて、分離することができます」

「顔のある円盤にしか見えないが、ロボットを内蔵

しているという訳か……君たちの神はロボットなのかね？ 技術が進むとそう考えるようになるのかね？」

「そうではありません。でも、地球でも神様や英雄の巨大な像を作ったでしょう」

「それはそうだが……」

宇門は、エジプトのスフィンクスや、アメリカの自由の女神、日本の大仏像などを思い浮かべた。

「確かに地球でも、地形を変えたり雷を落としたりする神々が信じられていた。キリスト教の神は天地を始め世界を創造したことになる」

「フリード星での伝説も似たようなものでした。ただ、只一人の神を信じるような強い宗教ではなかった。世界を創る力への素朴な信仰だった」

「確かに我々地球人ははそういう神をあがめるために像を作ってきたね。作ることを禁じた宗教も一部にはあったが……。具体的な神が想定されていない場合でも、人を超えた力の存在が信じられ、信仰の対象となってきた。だが、それはあくまでも信仰上のことだ。少なくともこの地球においては、偶像が現実の力を持つことなど無かった」

「形だけしか作れなかったのは、動かす技術がなかったからではないのですか」

「それはその通りなのだが――」

確かに、巨大な偶像を好んで作りたがった時代には、巨大ロボットを動かす科学技術は存在しなかった。実際に巨大ロボットを動かせる程度に科学技術が進んだ時代になると、宗教的理由で巨大な偶像を作ることはほとんど無くなっていた。

「形だけの像に力が宿ると信じられるのであれば、現実に出せるならもつと信仰の対象になるし、実際に星を守る。そう思いませんか？」

ちよつと待てよ、と宇門は思わず眉を寄せた。国民を大量に粛正したことで有名な旧共産圏のリーダーを思い出したのだ。確か、広場に巨大な像が建てられていたはずだ。それが実はロボットで、先頭に立つて粛正の実力行使をする、などということになったら、悪夢以外の何物でもない。

「――地球ではそもいきそうにない気がするが。それはともかく、君の星では偶像を信仰の対象にしたというのではなく、逆に、偶像に天地創造の力を持たせたということなのか？」

「そうです。フリード星の科学力を結集してグレンダイザーを作ったのです。交流のあつたまわりの星に比べても、フリード星の科学技術は進んでいた。十分に守護神となるはずだった」

「グレンダイザーは星を作れるというのか……」



「宇門はため息をついた。

「あなたに借りた本に出ていたようなことなら、大抵はできます。海を割り、大地を削ったり山を動かしたり、雲を落としたりといったことです。あなたがたの言葉では、テラ・フォーミングと言ったのでしょうか？」

「それは何かが違う、と言おうとして宇門は天井を見上げた。本に出ていた、とはいっても、神話の解説として出ていたはずだ。十分に進んだ科学は魔法どころか、もはや神話の世界でしかない。宇宙観測と開発を生涯の研究テーマと決めた宇門にとって、テラ・フォーミングはもちろぬ研究対象の一つではある。それが、神の奇跡を持ち出す他にない現象で語られようとは……。」

「一体どういう原理でそういうことが可能なか想像もつかん。我々が人を送り込むのは今のところ月までが限界だ。それも、そう頻繁に気軽にやれることではない。無人の探査衛星でもせいぜい太陽系内しか到達しておらん。大気圏離脱も再突入も、百パーセント成功というわけにはいかん。どうやら、縄文時代と今の我々の間の科学技術のギャップより、我々と君たちの間の科学技術のギャップの方がはるかに大きいようだ」

「フリード星はこことは別の銀河にあります。フリー

ド星の技術では重力も慣性も制御できて、空間転移も可能です。もっともその程度は、フリード星と交流のあったいくつかの星でも可能です」

「そこまで科学技術が進んでも守護神が必要なのかね」

「ええ……」

「科学技術で神話の世界を実現させることができるのに？」

「銀河を超えて飛び、脳そのものに直接情報を送り込んだり、生命ですらもある程度自由に操れるまでになつてさえも、なお、僕たちが何処から来て何処へ行くのかという問いに答えを出すことができなかった。なぜ今のような存在なのかということについても。だから、何らかの形で信仰を残すことが必要だったので」

「極端に技術力のレベルが違っていても、フリード星人は地球人と結構共通する面を持っているのではないかと宇門は思った。それならば理解しあえるし、うまくやっついていけるだろう。」

「それでは、君は、フリード星の守護神に乗ってきたのだから、何か宗教的な仕事をしていたのかね？ た

とえば祭司か神官のような……」

「僕はフリード星の王子でした」

王族が神事を司るといふのは、地球の文明でもしばしばみられたことである。妙なところで地球人とフリード星人は似ているようだ。

「それに……通常の軍備の他に守護神まであったら、他の星だつて侵略を仕掛けてはこないと思つていた」

「抑止力として使おうということだね。地球でも似たような発想で軍備増強を行っているが。だが、それがどうして地球にやつてくることになつたのかね」

「予想しなかつた方法で奇襲を受けたのです」  
デュークは目を閉じた。

「強大な軍事力を支えるだけの科学技術があつても、フリード星は軍事国家にならうとはしなかつた。しかし、ベガ星は違つた。ベガ星にとつて、守護神グレンダイザーは、最も強力な兵器として魅力的だつたのでしよう。ベガ星の技術であれだけのものは作れないから、奪おうとした。そのためにフリード星は——」

「しかし、それだけ科学技術が進んでいたのなら、普通に索敵の能力くらいは持つていた筈じゃないのか？ 軍事行動だとわからない形でB C兵器でも使われたのかね？」

潜伏期間と殺傷力や感染力を調節したウイルス人間を感染させ、普通の観光客を装つて相手の国をうるつかせれば、それだけでも十分な脅威になるに違いない

い。こんな時に宇門が真つ先にパイオテロの可能性を考えたのは、暮林の影響もあつたかもしれない。しかし、デュークの答えは違つていた。

「奴らは動物を使つて攻撃したのです」

「一体どうやつて？」

「高性能ベガトロン爆薬を仕込んだ小動物をフリード星全土に分散させて、爆発させたのです」

ドブネズミやコウモリやカラスに爆薬を仕込んで放した後、全部一度に爆発させるようなものだろう、と宇門は推測した。数が極端に多い同時多発爆弾テロが可能になる。仕掛けられた側は大混乱に陥る上、しばらくの間は、一体何が起きたのか見当もつかないだろう。

「フリード星全域で、軍も警察も対応に追われまじた。爆発は、国の中枢施設でも起きたから、軍や警察自体にもかなりの被害があつたのですが……」

そうして、新たな軍事的行動に対応する余裕が無くなつた状態で、ベガ星連合軍が奇襲してきたのだという。空襲で主要な軍事施設を——勿論王宮も——を破壊した後、ベガトロン陽子爆弾で惑星全域を焼き尽くした、というのが攻撃の内容であつた。

「何ということだ……。では、君の星に生存者のいる見込みは全くないということなのか」

「あのときの侵略は、フリード星人と交流のあった近隣の星にも、同時に行われました。僕は、何とか追撃を振り切り、その後三年ほど銀河の中のいろんな星を回ったのですが、次々に攻撃されてどうすることもできず、やむなく隣の銀河まで逃れたのです」

宇宙はコーヒーをつぎ足した。

「我々の星では、国家間で弾道ミサイルを突き合わせてにらみ合っているのだが、君たちの星には同様のシステムは無かったのか？」

「ありました、しかし……」

最初の攻撃が恒星間ミサイルでやってきたのであれば、迎撃と同時に報復が可能な筈であった。しかし、最初に極端な数の同時多発爆弾テロをしかけられ、地上が麻痺状態になったところに宇宙からの侵攻が行われたので、防空ラインを突破された空軍が地上に援護を求めても、対応ができなかったのだ。その結果、報復を行うより先に惑星全体が灰になった。

「悪魔的に効率の良い殲滅方法をとる連中だな、そのベガ星の奴らは」

「この先気がかりなのは、向こうの銀河を滅ぼし尽くしたベガ星連合軍が、今度はこちらを侵略に来るのではないかということなんです。グレンダイザーのコンピュータは、ここなら安全だと判断してはいたのです

が——」

「杞憂に終わってほしいものだな」

宇宙は、コーヒーを口に運ぼうとしていたが、思わずその手を止めていた。地球人類は、矛先を身内に向けているとはいえ軍備はしっかり持っている。それを宇宙に向けることになったとしても、彼等の技術力の差があまりに大きければ、軍備などあっても無いのと同じである。統一政府のない地球の場合、動物を使った爆破攻撃が全地球規模で行われたとしたら、疑心暗鬼に陥った国同士がめいめい勝手に戦端を開いて、報復合戦の挙げ句自滅に突き進む可能性の方が高かった。地球に対してフリード星と同じ手順で攻撃する場合、後の空爆やベガトロン陽子爆弾の投下は不要かもしれない。

「しかし、多少科学力で劣っていたとしても、ベガ星はフリード星を滅ぼす力を持っていたのだろうか？ それに比べれば、地球はベガ星にとって、未開の星もいいところだ。我々を攻めたところで得られる技術も力もありはしないし、人間を捕らえたところで、知識の差が有り過ぎて、ベガ星の連中にとっては使い物にならんだろう」

「奴らは使える星を探しているのです。行った先に先住民が居ても居なくてもそんなことは問題ではない。

「使えるなら奴隷か兵士にし、使えないなら皆殺しにするだけです」

「——遊牧民が草を求めて行き着いた先で、草むらに住み着いている虫の存在など気にはせんだろうな。ベガ星連合軍にとって、我々地球人の存在は虫けら程度ということか」

「多分そうだと思います。彼らは人類の存在など問題にしないでしょ」

「とにかく、これからどうするかを決めなければならん。皆を集めて話をするから、そのときは同席してほしい。今日はもう休みなさい」

#### PHASE 10 宇宙科学研究所・会議室

「デューク・フリードの話から、これまでにわかったことは以上だ」

「宇宙は会議室を見渡した。所員と、医師と出向組の暮林の全員が集まっており、宇宙の隣に、車椅子に載せられてデュークが座っている。」

「その……ベガ星の科学力の方がフリード星に勝っていた部分はあるのですか？」

「山田が訊いた。  
「生物を改造することにかけては、フリード星より

ずっと進んでいました。一方、材料やロボットを作る技術、重力制御技術や光子エネルギー利用についてはフリード星の方がはるかに進んでいました」

「ベガ星というのは、我々がそう呼んでいる星のことですか？」

「地球では、七夕のひこ星をアルタイル、おり姫をベガと呼んでおり、それぞれ地球から十七光年と二十六光年のところにあり、いずれも銀河系に属している。」

「いいえ、僕はこの銀河に一番近い隣の銀河から来ました。ベガ星というのは、フリード星の近くの星系に僕たちが付けた名前ですから、この銀河系で皆さんがベガと呼んでいる星とは別のものです」

「じゃあフリード星はアンドロメダ銀河にあるということですか……」

「アンドロメダ銀河 M31(NGC224)は、太陽系から約二百三十万光年離れていて、近くに丸い伴銀河 M32(NGC221)と細長い伴銀河 M110(NGC205)がある。銀河系に最も近い銀河である。」

「知つての通り、私はこれまで宇宙人実在説を唱え、学会からは異端扱いされてきた。デューク・フリードとグレンダイザーの確保は、宇宙人実在説の決定的証拠だ。発表すれば私の説は認められるだろう。だが——私は発表を見送ろうと思う。君たちには当分、

異端扱いのままの私のもので仕事をしてもらうことになってしまった、済まないと思っている」

「我々は所長に従いますが、しかし、所長は本当にそれでよしいのですか？」

所員たちがざわめく。宇門はかるく咳払いをしてそれを静めた。

「これが我々にとつて、異星人とのファースト・コンタクトであることに間違いはない。我々にとつては脚光を浴びるチャンスだが、今発表すれば、デューク・フリードは好奇の目にさらされ、グレンダイザーもろとも世界中から寄つて集つて研究材料にされてしまつたろう。異星人との交流がありふれたものであつたら、単なる一亡命者としてひっそり扱つただけだろうが、残念ながら今の地球ではそうはいかん。故郷を滅ぼされ、命からがら逃れてきたデュークを、この上実験材料にするには忍びないのだ」

宇門は少し間をおいた。

「ならば、地球人類の対等の友人として名乗り出てもらい、この世界に受け入れてもらつてはどうか、とも考えた」

「まず、信じてもらえないんじゃないですか」

「私も大井君と同じことを考えたよ。おそらく、デュークが名乗つただけでは信じないだろうな。私も含めて、

全員夢でも見たのだらうと言われるか、狂人扱いされるのが落ちだ。信じさせるには証拠が必要だ。デュークが我々人類と明らかに違うということや、グレンダイザーの性能を示す必要があるだろう。結局は研究対象としていじくり回されることになる。銀河を超える超科学の産物だ。科学者だけが関わるならともかく、政治家や軍に知れたら、最悪の場合は地球上で争奪戦になるだらうな」

「ベガ星の侵攻については、早めに危険を知らせた方が、対策を立てる上でもいいのではありませんか。このところの状況を考えると、警告を無視するほど皆が平和ボケしているとも思えませんが」

「ふむ——しかし、今度は地球上の生命体同士の小競り合いでは済まないからな。それに、ベガ星連合軍の侵攻は、今のところ、来るかどうかもわからないものだ。現実には差し迫つた別の戦いをしている最中に、ベガ星に備えろと主張しても受け入れられないだらうな」

宇門は腕を組んだ。

地球人同士の武力紛争——人類同士、あるいは人類とそれ以外の地球先住民の紛争——は、相も変わらず地球上のあちこちで起きていた。日本は、幸いにして他国との戦争はしていなかったが、その代わり

に、光子力研究所が成り行きで防衛の拠点となつてしまつていた。

光子力研究所はDr.ヘルを相手に戦つてゐるが、Dr.ヘルが差し向けてくるのは地球上の先史文明（古代ミケーネ文明）の遺物や、新たに作られたロボットである。古代ミケーネ人自身が再び甦る可能性も指摘されてはいたが、まだはつきりした証拠は得られていなかった。Dr.ヘルは世界征服をまくろんではいたが、兜十蔵へのライバル意識が強かつたため、当面の目標をジャパニウムの略奪とマジンガーZの破壊、及び光子力研究所の占領に限つており、戦いはDr.ヘルの私戦かつ局地戦の様相を呈していた。国防軍は避難活動や迎撃に協力していたが、近隣諸国の軍隊、特に最大兵力を持つ米軍は、表だつた動きはしていなかつた。下手にちよつかいを出して紛争を拡大するのは得策ではないため、これらの研究所がどう撃退するか様子を見ていたからである。

「もし、フリード星と同じような攻撃が地球に対しても行われたなら、地球の技術力ではとうてい守り切れはせんだろう。ベガ星連合軍が最初の攻撃を手加減して降伏を勧告してきた場合、統一政府のない地球では対処不能に陥る可能性が高いな。どの国であつても、唯々諸々と侵略を受け入れたりしたら、その国の

権力が真つ先に崩壊する。自国の利益と権力者の保身を最優先と考えるなら、他の国をベガ星に勝手に売り飛ばす国さえ出てくるだろう」

さらにその後、「そつなつた場合は、放つておいても私の学説は全世界に認められるだろうな。同時に、研究業績だろつが学説の争いだろつが、人類にとつては無用の長物と化すだろつがね」と付け加えて、宇門はデュークの方を向いた。

「残念ながら我々の社会はこの程度の意思統一しかできておらん。ところで、これから先、どうするのかね」

「僕の戻る星は既にありません。フリード星が滅ぼされてから三年ほど、あちこちの星を回りましたが、僕が生存可能な星はことごとくベガ星の侵略を受けてしまいました。地球に長居をするのも申し訳ないので、いずれは新たな星を探して出て行くことと思ひます」

「たつた一人で、かね？」

「……ええ」

「また追撃されてどこかの星に不時着しても、今度は助かるとは限らんぞ」

「そのときは、グレンダイザーを破壊し、僕も死ぬことになるでしょう。男性の僕一人が生き残つても、子孫を残すことはできません。僕たちは既に滅ぼされた種族なので……」

デュークは顔色一つ変えずに言った。宇門はわずかに目を見開いた。言葉に冷静さや冷徹さは感じられず、かといって無理をしているわけでもない。生きることに自体に、もはや興味も関心もないという風に見えた。時間と労力を注ぎ込んで助けたのはもう一度死なせるためではない、と宇門は思わず強い口調になる。

「遅かれ早かれ絶滅する運命だと言いたいのかね」  
宇門はデュークの蒼い瞳を見据えた。

デュークは地球人だとすると十八歳くらいに見える。フリード星で王子だったということは、父王が居たはずだから、実際その程度の年齢なのだろう。自分が十八歳の頃は何を考えていただろう、と宇門は記憶をたぐった。宇宙の神秘を解き明かすことに、夢と希望を持って学問に励んでいたし、自分の未来も、研究の進歩や発展も、何一つ疑うことなく無かった。たとえ境遇がどうであれ、やっと助かった若者が、またすぐ死ぬことを考える状況というのは尋常ではない。第一、人間は、命ある限り、生きることを放棄してはならない。「簡単にあきらめるんじゃない」と叱り飛ばさずと思つたのをかろうじて堪えて、宇門は深呼吸した。同胞をすべて失つた生き残りの王子に対して、個人的理由だけで生き抜けと説得したところで、心には響かないだろう。共に生きる者でも居れば別だろう

が……。

「そうだな——君さえ良ければ、しばらくここで暮らさないか？ 私の家族として」

とつさの思いつきだった。口にしてみて宇門は自分でも驚いた。だが、すぐに説得の方法を探し始める。

「なぜ……？」

「もうわかつていると思うが、地球——いや、この日本という国はそれなりに管理された国だ。天涯孤独でいきなり放り出されたら、普通に暮らしていくのは難しいだろう」

現在おかれている状況をデュークがすぐに理解できなくても構わない。もう少しじっくりいろいろんなことを考える時間があれば、今はそれだけでも良いのではないか。宇門はさらに続けた。

「仮に滅びる運命が避けられないとしても、滅びるまでの時間と滅び方については選ぶ余地があると思うがね。地球は、科学技術の進歩の度合いがフリード星に比べてあまりに低く、原始的な環境だという点で不満があるかもしれないが、少なくともここには平穩な普通の暮らしがある。時間が経てば状況も変わるだろうし、何か見えてくるものもあるのではないかな」

往生際が悪いのは大いに誇つてよいことだし、研究者の専売特許でもない。生き延びられれば次の選択を

することもできるに違いない。

「……そんな風に考えたことはありませんでした」

「暮らすにしても、何かあったときの後見が必要だな。お前は今日から私の息子ということにして、宇門大介と名乗ってもらおう。私の友人たちにもそう紹介する。皆もそのつもりでいてくれたまえ」

宇門は研究所員達を見渡した。

宇門は独身なので、宇門の一存で養子を迎えても何も問題は無い。そのことを知っている研究所員たちは軽く頷いて肯定する意志を示した。

「それでは、ベガ星の侵攻に備えてできることをしておこう。とは言っても、我々にとつては、普段の研究の延長線にあることに過ぎないのだがね。まあ、何も起きなければそれでいい。グレンダイザーの性能についてはいわずれ見せてもらうとして、飛行原理の解明を早急に進めてもらいたい。むろん、デューク——いや、大介にも協力してもらおうことになる」

「それは……できる範囲ならかまいませんけど」

「では、我々が宇宙へ飛び立つための技術確保を最優先としよう。我々より遙かに進んだ科学力を持ったフリード星でさえ、グレンダイザー一機ではどうにもならず、ベガ星に滅ばされたのだ。超光速だの重力制御だのを可能にする科学技術で作られた武器のコピーな

ど、地球では無理だ。かといって、とつとと両手をあげて降伏したとしても、ベガ星連合軍は地球をそのままにはしておいてくれんだろう。地球は焦土と化し、人類は皆殺しだ。それなら、侵攻を早めに察知して逃げ出すしかないだろう」

「グレンダイザーの飛行性能はどの程度のものでしょうか？」

佐伯が訊いた。

「単独での大気圏離脱・再突入は何度でも簡単にできます。大気圏内での飛行速度はマッハ九。恒星間飛行では超光速での飛行が可能です。宇宙のあらゆる場所で戦闘機動をすることができます」

所員の間で声にならないため息が漏れた。ロケット推進の場合は、推進剤を化学反応で得たエネルギーで噴射させる力の反作用で加速している。従って、必要な推進剤をすべて抱えて上がることになり、推進剤が多ければそれだけ長く加速できるが、その分重くなることで損をする。大気圏外で戦闘機動が可能だということとは、軌道を自由に変えて、どこを飛んでいる物体とでもランデブーできることを意味する。地球の技術では、そんなことを可能にするだけの推進剤を持って上がることは不可能で、あらかじめ計算して近い軌道に投入された物体同士を接近させるだけが精一杯であ



る。

「——ホーマン軌道トランスポアもおかまいなしにエンジン全開のまま、どの軌道でも自由自在に上がれるということか。いや、もはや軌道というものを考える意味も無いかもしれないな。そして、そのまま太陽系脱出もできる、と」

「じゃあ、一体どんなエネルギーを使っているのですか？ 我々のように化学反応だけで飛んでは思えないのですが」

「『光子フォトン』というものです。クリーンなエネルギー源として利用できます」

「名前からすると、我々の世界の光子フォトンと同じものように思えてきますが……」

「あなた方の言う光子フォトンのあるところには必ず『光子』が存在しますが、それ以外にも宇宙には分布しています。ただ、検出したり利用するには、重力場や慣性を操る物理学が必要になります——あなたがたがまだ発見しておられない理論ということになると思えます」

「聞いての通りだ。おそらく、グレンダイザーは重力場推進と慣性制御の両方を使っているだろうし、エネルギー源自体が、光子フォトンという我々にとって未知のものだ。光子利用の方法と、飛行原理の解明の両方を

並行して進めることになる。宇宙観測も強化する。忙しくなりそうだね」

「材料はどうしましょう？ 光子の実験装置やエンジンを開発するにしても、我々の手持ちの材料で性能が追いつくかどうか……」

大井が質問した。

「そういえば、グレンダイザーの装甲の分析がまだだったな。この分野の専門家は弓教授だが、向こうは今、機械獣との戦いで余裕が無いだろうな。騒ぎが落ち着いたら、分析装置でも借りに行くでしょう。それまでは、手持ちの、宇宙開発用の材料で何とかするしかないな。」

「わかりました」

「調査のために、大介には何回か飛んでもらうことになる。が、当面は、とも我々の科学でグレンダイザーを整備したりすることはできそうにない。管制する位しかできん。それでいいかね」

「ある程度までなら、整備無しでもグレンダイザーは大丈夫です。簡単な自己修復機能は持っていますから」

「自力で大気圏脱出・再突入できる性能なら、地球上どこにでも簡単に行けるだろう。ただ、我々の航空機の飛行に被害があつては困る。航空機と衝突したとし

ても、グレンダイザーには傷一つつかんだろうが、航空機の方は無事では済まない。この研究所は単独でロケット打ち上げのミッションを行っていかから、航空管制のデータも回してもらっている。大介、我々との通信およびデータリンクを保てるようにグレンダイザーを調整しておいてくれないか」

銀河を越えて航行する円盤が持つデータ転送仕様に、地球側の設備を合わせるなど、どだい無理なことだ。技術が進んでいる方で合わせてもらうしかない。「ところで、観測の強化といっても、具体的にどうしましょう。電望望遠鏡だけでは限界があります。稼働中の宇宙望遠鏡の方は汎用ですし、地球の周りからしか観測できません」

山田がファイルをめくりながら言う。宇宙は立ち上がった。

「この研究所が何をするとするか、まさか忘れたわけではないだろうね、山田君。まずは、宇宙科学研究所で製作可能な最大サイズのロケットを作り、アンドロメダ方面を観測するための新たな探査機を投入する。可能な限り早急にだ」

## MISSION 2 Star Road

### PHASE 1 宇宙科学研究所・地下工場

幅二百メートル、奥行き百三十メートル、高さ八十メートルの巨大な空間は、その日から不夜城と化した。

宇宙科学研究所のヘリポートの直下にある大工場<sup>V A B</sup>では、企業から打ち上げを依頼された全長四十メートルほどの商業用ロケットが、ほぼ組み上がった状態で、何層にも並んだ可動床の真ん中を貫いていた。

宇宙飛行士の訓練を受けた経験もあつたので、宇宙望遠鏡を打ち上げることになった時から、有人宇宙飛行のプランを視野に入れ始めた。人が宇宙に出て行けるようになれば、単に衛星を打ち上げるだけよりもずっと研究が進むと考えたのだ。だから、積極的に衛星の打ち上げを行い、技術の向上と蓄積をはかっていた。宇宙の設計やマネジメントがよかったこととスタッフに恵まれたことの両方が幸いして、成功率が他の施設に比べて格段に優れていたため、最近では、衛星の打ち上げを業務<sup>ウヂギ</sup>として引き受けるようになっていた。

年明けに商業用ロケットの打ち上げを行い、材料試